

滋賀大学データサイエンス学部の現状

滋賀大・データサイエンス学部 竹村彰通

滋賀大学では、本年4月にデータサイエンス学部を開設した。定員100名のところを110名の学生が入学した。男女比は男子が81名、女子が29名である。日本で初のデータサイエンス学部であり、昨年の秋にはまだまだ高校生への知名度が低いという予備校からのデータがあり、入試の倍率についてかなり心配してしたが、結果的には前期日程3.4倍、後期日程9.3倍という高い倍率となった。ただし、AO入試での合格者が少なかったために、AO入試で残った定員を前期日程に繰り越したため、前期日程の実質的な倍率はそれほど高くはなかった。

データサイエンスは情報学と統計学の理系的なスキルの基礎の上に、データから価値を引き出して社会やビジネスの課題を解決するための学問であり、本質的に文理融合的な分野である。このため、高校生に対しても、統計とコンピュータを社会的な課題に応用したい文系志向の人材を求めていることをアピールした。また数学の試験問題については、選択問題を用意することで、数学IIBまでで受けられるようにしており、文系志望の学生でも受験できる。春学期の私自身の新入生対象の講義でアンケートをしたところ、理系と文系の比は約6:4だったので、文理融合のメッセージはそれなりに受け入れられたものと考えられる。

文理融合というスローガンは、受験の観点からすると「言うは易く行うは難し」の側面が大きい。実際に、高校の進路指導の教員から「データサイエンスは結局は文系なのか理系なのか」という質問が多く、その度にどちらでも受験できることを説明する必要があった。今後も文理融合であることを強調していかないと、受験の有利さから理系の受験生に偏る傾向も予想される。

データサイエンスの理系的な基礎である情報学や統計学は講義でも教えることができるが、データから有益な情報を引き出す価値創造の部分は講義ではなかなか教えにくい。できるだけ社会の実際のデータを用いた演習によって、学生がデータ分析の(試行錯誤の上での)成功体験を積むことが重要である。しかし、企業の実際のデータを教育に使うには、企業秘密や個人情報の扱いの問題があり、実際にはかなりのハードルがある。生のデータに対して一定の秘匿処理を施すなどして、教育用に編集する必要がある。それでも、価値創造の部分がデータサイエンスの「出口」であるから、ここをいかに充実させられるかが非常に重要である。このため、滋賀大学データサイエンス学部では多くの自治体や企業との連携を進めてきており、すでに20以上の協定等を結んでいる。業種もIT系、金融系などさまざまである。

なお、新学部のホームページは以下にあり、カリキュラムの詳細や企業連携等を含めさまざまな情報を提供しているので、参照されたい。

<https://www.ds.shiga-u.ac.jp>